



# 校報 あずまね

<https://shiwa3.chu.jp>

時間啄啖

文責 佐藤智一

## 令和 4 年度運動会「これが三中だ！魂を見せろ！」



先日の解団式で、運動会の全ての活動が終わりました。紅組団は、競技の部・組団合戦の部・総合の部で優勝。白組団は応援合戦の部で優勝。勝負がついても両組団の生徒たちの表情はとても晴れやかで、最後のスピーチでは、「みんなのおかげでとても楽しい運動会にすることができた。ありがとう。」といった声がたくさん聞かれました。3年生は最上級生としてこの行事に望み、大いにリーダーシップを発揮しました。2年生は学級毎に紅白に分かれて競い合い、それぞれのチームの中核となって運動会を盛り上げました。1年生は、中学生になって初めての大きな行事に上級生とともに参加し、紫波三中のよさを実感したのではないかと思います。

必死に走る姿、一生懸命応援する姿、全力を出し切った笑顔、勝っても負けても互いの健闘を讃えあう姿…。この日の晴れ渡った青空のように、とても爽やかな、素敵な運動会だったと思います。たくさん撮影した写真には、生徒たちの輝く姿が写っています。整理が出来次第、紫波三中ウェブサイトへアップしますので、もうしばらくお待ちください。

## 「あずまねカフェ」ガイダンス

6月10日金曜日に、キャリア教育の一環として地域で働き暮らしている大人たち 20 名を学校に招いて、皆さんと少人数で対話する特別授業を計画しています。計画のきっかけは、紫波三中の 60 周年記念事業でしたが、昨年はコロナで延期になってしまいました。私は、よくあるような講演会でたった一人の大人の話聞くよりは、生徒たちが親や先生以外の大人と直接触れ合い気軽に話をする催しにしたいと考え、地域の大人をたくさん学校にお招きして、ワールドカフェという対話の手法を取り入れることを提案し、実行委員会の方々にも賛同していただきました。

ワールドカフェの対話の目的は、ひとつの答えや結論を出したり課題を解決したりすることではありません。参加者全員が意見を言い合い、新たな気づきを得たり、参加者同士の理解を深めたりすることが主なねらいです。4～5 人の少人数グループで対話し、途中でメンバーをシャッフルするので、短時間でいろんな話題に出会うことができます。世の中にはいろんな人がいるのに、皆さんが友達や家族、先生以外の人と話す機会は、そうないものです。初めて出会う人と話すると、人はそれぞれいろんな価値観を持って生きていることがわかります。それは自分の思いや考えを広げ深める機会になります。10年後、20年後の自分を思い描くヒントにもなります。いろんな選択を経て今ここで働き暮らしている大人たちは、皆さんにとって学びの標本です。これからの生き方の一つのサンプルです。皆さんもこれから先、自らいろんな選択をして生きていくこととなります。いろんな大人の話聞いて、自分がこれから何を大事にしてどんな選択をしていくかを考えるヒントを掴んでほしいと思います。

そして今年度は、総合的な学習の時間に取り組む「ふるさと学習」で、1年生には「調べてみたいことを探す」、2年生には「体験してみたいことを探す」、3年生には「解決してみたいことを探す」ことをきっかけに、それぞれ探求テーマを設けて学んでいくこととなります。秋の紫波西学園授業参観日には、再び地域の方々を招いて、みなさんの探求学習の成果を発表することも計画しています。

探求学習で大事なことは、「自分で問いを立てて学ぶこと」です。今回の「あずまねカフェ」でも、事前にゲストティーチャーの自己紹介カードを配ります。まずはそれを見て、直接聞いてみたいことを考え、質問を準備します。それが対話のきっかけになります。対話的な学びで考えを広げ深めることは、皆さんが日頃から授業で行っていることです。ゲストティーチャーから刺激を受けて、自分の心に浮かんだことを遠慮せずに聞いてみることで、対話を充実させると思います。

ゲストティーチャーの方々も、「あらゆる立場の大人達が子どもたちの未来と一緒に考え育てる」というあずまねカフェの趣旨に賛同して、学校に来てくれます。そして、次年度以降のゲスト・ティーチャー候補を紹介していただくこともお願いしています。これから先、「あずまねカフェ」が、大人も子供も共に学ぶ日として育ってほしいなと願っています。

## 第46回全国児童・生徒木工工作コンクールで「農林水産大臣賞」を受賞しました



昨年12月に岩手県大会で最優秀賞を受賞した作品が、全国大会で中学校部門の最高賞にあたる「農林水産大臣賞」を受賞しました。総合文化部の須川結衣さん、鷹鷲なるみさん、中村ゆきかさん、平沢里梨香さん、藤原琉輝也さん、本当におめでとうございます。ここに改めて、制作に取り組んだ生徒たちの声を紹介します。

### ● 作品を創ってみて

レーザーカッターで自分たちの原画通りに形を切り抜くことが出来たので、楽しかったです。1枚1枚の絵を重ね合わせたら奥行きのある世界が出来たので、感動しました。4人で描いた本を開いて4隅に立てて、本の中の空想の世界をのぞき見れるようにしました。その中に柱と木に巻きついていた蔓の木を立てると、上空につながる空間が出来ました。すると、渦巻く木が天に昇る龍のように見えてきたので、上に雲の透かしのあるドーム状の天井をつかって、その下に雲を浮かべることにしました。そして、雲の下の空間がぼっかり開いたので、そこにお寺の天井にあるような天蓋を吊るすことにしました。つくっていくうちにどんどん発想が広がり、面白い作品になったと思います。

### ● 一番見てほしいポイントは

この作品は、4つの本のページから天上へと続く空想の世界を表したものです。「葵」は一部屋に閉じ込められた人間たちの物語です。「海」は水の世界との出会いと別れの物語です。「風」は美しい和の国を巡る旅の物語です。「愉」は森に住む妖精と愉快な仲間たちの物語です。地面や空間には本の世界から飛び出した物語のかけらを、4本の渦巻きの木にはそれぞれの物語の主人公を配しました。天上では飛天が雲に乗って音楽を奏でています。その調べに誘われて4本の木は天に昇って龍になり、風雲を起こすことを表現しました。

### ● 苦労した点は

絵をカットして重ねてみたら中があまり見えないものがあったので、中が透けて見える絵に修正したところでした。本のページを重ねても構図のまとまりを保つのが難しかったです。絵によっては切り抜くと細くて壊れやすくなってしまったので、丁寧に扱う必要がありました。本のページを数枚合わせて接着した後、それが垂直に立つようにベルトサンダーをかけるのが意外と難しかったです。本のページを1枚ずつ挟めて止めようとしてつくったパーツは、時間をかけてつくったのに板がうまくはまらず、ボツにするしかありませんでしたが、一部を使って糸巻きにつくりかえました。主人公のキャラクターは原画どおりでは大きすぎたので、本から抜け出してきたようなサイズに縮小しました。ピアノ線でパーツを固定する時、下穴が小さいためにすぐに見失ってしまい、差し込むのに苦労しました。天蓋から吊るした八芒星と木のビーズ球は、紐で吊るしたら斜めになってしまったので、軸を竹籤にして斜めにならないように固定しなおしました。天蓋の外枠の下が寂しかったので、ジブリ映画「かぐや姫」に出てくるような雲に乗った飛天を最後に吊るして、ようやく完成形にすることが出来ました。

### ● 木に触れてどうでしたか

木を使った大きな作品をつくるというのは初めてでしたが、木の机や椅子とは少し異なる柔らかい感触を味わいました。木の色合いも生かしたかったので、彩色は部分的にすることにしました。レーザーカッターで加工すると、硬い木がぐねぐね曲がることに驚きました。苦手な作業もたくさんありましたが、それを乗り越えて、この作品を仲間や先生たちと共につくり上げることが出来ました。部活動でこのコンクールに初めて挑戦したことは、新鮮でとても楽しかったです。レーザーカッターを利用した作品づくりは、機会があればまたやってみたいです。